

禁欲生活の果ての果てに

歌舞伎揚げ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

筋肉と禁欲と友情と熱意と努力とかそんなのがテーマにしたい。

初めての小説なので何かあったら好きなだけ感想にブチまけて下さったら嬉しいです。

ノリで書いてるので矛盾、タイトル詐欺ありまくりです。

# 目次

筋肉と禁欲と	1
第2話	6
IS適正値を伸ばせ!	10
夜のトレーニング	14
素人は素手が1番	18
あつ、待つ、果て:	22
周りは優しい人達だらけ byビオレ	27
宴と道案内と筋肉拉致誘拐事件(序)	32
筋肉拉致誘拐(終)、そして	38
性別行き先五里霧中	43

## 筋肉と禁欲と

「フシユルルルルウウウ」

筋肉界のBIG3に深く感謝をしながら私は筋トレに取り組む。

自分を叱咤激励しながら、ともすれば自分に酔っているような、しかし油断せず正しいフォームで確実に負荷を体にかけていく。息を止めず、規則正しく、吸って、吐く。

ああたまらない、筋肉が美瘻孳を繰り返している。筋肥大トレーニングを心ゆくまで堪能する。

もちろん、美しい肉体の為に全身くまなく鍛える。チキンレッグは許されない。

脈動する鼓動は取り入れた酸素を急げ急げと供給する。

たまらん、たまらんどおお！

やはり禁欲×筋トレは最高だあ！

筋トレ終え、ストレッチをしてたら落ち着いてきた。冷静に自分の状況を振り返ろう。

私は選ばれてしまった人間だ。ISを動かしてしまった人間だ。

あれやこれやとしてる内にIS学園とかいう所に入學する事になつたららしい人間だ。

IS学園とかいうなんか花園に行き、ハーレムを築いてみたいとも思う。しかし、この両肩に乗った期待は世の中の男子の希望となるものだ。

ただ鼻の下伸ばすだけの3年間は送りたくない。心身共に充実した学園生活を送りたい。

とうかやはりあれだ、ハーレムとか鈍感野郎かイケメンか、それかプロのジャグラー以外に回せやしない。後ろから誰かに刺されて

終いだ。

女子と仲良くなり、1人の女性とお付き合いし、幸せな学園生活が  
いいな。

その為にはまずは、この覚悟の表れとして

私は、禁欲生活を、してみせる!!!

鼻の下を伸ばしたりなんかしないんだから！

キモいな今の：

く時は流れてく

やってきました入学式！禁欲生活は順調快調、エロを断ち、筋トレ  
と勉強に明け暮れ、友と語らい、また会おうと言って別れ、このバル  
クアップした胸は期待と少しの不安に満ち満ちている。

やたら長く感じる廊下は早まる鼓動が錯覚させているのか。

落ち着け、大丈夫だ、ナイスガイを目指して邁進した日々は無駄で  
はない。今の私なら上手く女子達ともやって行けるさ。

友も言っていた、構えず、カッコつけず、いつも通りの君がナイス  
ガイさと。

さあ！たどり着いたぞ1ーA!!

この扉の先には噂に名高いIS学園女子高生！

世の秀才天才選りすぐりと聞く。しっかりと失礼の無いように、し  
かしいつも通りの自分で行こう。

そして私は扉を開けた。。。。

扉を開け、まず感じたのは嗅覚だった。  
甘く、魅力的な匂い。

次に視覚が、私の脳みそに情報を送る。  
右も左もキュートで可愛い女の子。

…、魔羅に、

魔羅に響くわ！

いけないこのままだと私は理性を保てないっ…!!

ああ、あたまがまっしろに「お、お前！もしかして面手美男麗か!？」  
そ、その声は?!

その声は間違いなく男子であり、私の禁欲生活を守ってくれた恩人  
であり、

もう1人の選ばれてしまった男であった。

「君が織斑一夏くんかい？」

私はこの男に深く感謝をしつつそう尋ねた。

「おうそうだ！そういうお前は面手美男麗（メンズビオレ）だな！これ  
から男2人だが仲良くやってこうぜ!!」

展開がはやいっ！しかし悪くない話だ！男1人とか辛いしな。

不安に漬け込み優しく絆す、この男、慣れてやがるよ！

モテるなこの男！なんかハーレム築けそうだよこの男！

一夜城のペースで築けそうだよ！

早くも友達一人出来そうで私のテンションは上がりまくりである。「そうともさー！私がビオレだ！ありがとう！君は我が体内の数億の命の恩人だ！こちらこそ是非、友達なってくれ！」

一夏は快活な笑顔で了承してくれた。

もう！ほんと大好き一夏！

「そうなんだービオレは広背筋が好きなんだ〜」

「そうなんだよ、やはり男たるもの大きい背中でありたいからね！そういう布仏さんも素晴らしい素質を秘めているよ。」

「そうかな〜ありがとう〜」

好きなお菓子トークからダイエットトーク、更に栄養やお肌の話をしていたら筋肉の話に行き着いていた。

そんな隣の席の布仏本音さんとのほほんと喋っていたら、見た様子新人さんな先生？が入室してきた。

「はいー皆さんこんにちはー！はいーこんにちはー！ありがとうございます！まずビオレ君！私は副担任の山田真耶です。よろしくお願ひしますね。」

「よろしくお願ひしますー！」

私は高校入学に当たって一つ決めたことがある。

周りがどうか気にせず、相手から送られた言葉にはしっかりと返そうと。そして仲良くなろうと。

山田先生の笑顔を見て私は幸せになりました。

その後は自己紹介タイムに入った。皆の名前を覚えようと躍起になつていた所で一夏の番が来た。

しかし、緊張で強張つた一夏の喉はぎこちない自己紹介を述べた。

まあ緊張するよねと思った。

その時、上腕の筋肉が我が友一夏の危機を告げた。

我が友を守らねば！

そう思った瞬間に一夏を庇うように右腕が煌めいた。

バシイイイイン!!!

響く音は我が友を守れた誇りの音だと錯覚する。

何奴つと思えばそれは一夏の姉様の織斑先生であった。

「何故庇う?」、織斑先生は尋ねた。

「私の筋肉が、友を守らんとしました。一夏が緊張して上手く自己紹介出来なかったからといって叩くのは些かやり過ぎでは?」

流石にやり過ぎでしょ。可哀想だよ。

必死に目から頼む分かってくれビームを送ったら織斑先生は分かってくれたのか教卓へ戻った。

そして巡ってきた私の番、緊張するがもう私には一夏と布仏さんという友がいる。

心強く、自信を持って私は口を開いた。

「こんにちは!面手美男麗です。2人目の男性操縦者です。焦らず皆さんとは仲良くなりたいです。よろしくお願いします!」

暖かい拍手がきた。そして女子全員がこちらを見てるのに気づき、私の脳みそがドーパミンを分泌し出した。

## 第2話

自己紹介も終え、授業間の休み時間に一夏と今後の自分達の立ち振る舞い、予定を立てようと話をしていたら御御足の速筋が見事な、大和撫子然とした黒髪少女がやって来た。鋭い目つきでこちらを一瞥しつつやって来た。

何故か背筋がゾクリとしました。背筋のゾクリがもう一声したら危なかつたよ：

「少し一夏を借りてもいいか？」

と聞いて来たのでどうぞどうぞと渡した。一夏は少女の名前、ほーきさん呼びながら後を追って出て行ったとき。

しかし、その瞬発力に溢れた下半身と相違ないファーストコンタクトの速さだ。恐らく最初に一夏に話しかけた女性なのでは？

出て行った2人の扉を眺めてたら、今度は下半身を露出しない丈長めなスカートに黒のストッキング、なんかええ事になってる金髪。

：あれは貴族だ！しかも多分イギリス人。

ということは、紅茶とですわ！の国!!貴族の話題についていけるか心配だなあ。

こちらは筋肉と日本語しかわかんねえ：

というかそもそも自分を構成する要素が女子高生向けではない事に今気づいた。こんなことなら乳液とか付けまつ毛の勉強をするべきだった!!

こちらの1人反省会など露知らない女性は私の前で止まった。

「よろしくて？」

「はいよろしいです。任せてください、どんなお願いですか？浅学な身ですが精一杯力を貸します。女性との会話のイロハも知らない自分ですが何を手伝えば？知ってる女の子っぽい言葉はヒアルロン酸とDHCの自分ですが懸命に与えられた質問に答えてみせます。任せてください。」

「あの、そんなに緊張する必要はありませんわよ？」

「ノーブスオブリージェと言って手袋を顔面に投げつけに来たのでは

なく?」

「そんなことする訳ないでしょう!」

「え、しないの?なんてお優しい人なんだ。セシリアーオルコツトさんは気品と美しさと余裕があってもうパーフェクト ヒューマンでは?!」

「お褒めの言葉は嬉しいのですがあなたの人間評価の採点が甘すぎでしてよ…」

セシリアさん(名前で呼んでいいって言ってくれた)はとつても良い人だった。

惚れそうでした。

山田先生の授業は人に分かって欲しいという感じが伝わり、こちらも頑張ろうと思えるような授業だ。多分、才能もあるけど努力の人なのだろう。そんな懸命さを感じる、後落ち着いてない。

しかしこの机は落ち着かない、近未来的というかなんといいか。あのコストパフォーマンスが全てと言わんばかりの木製の机が欲しい

：

後山田先生の授業を見てたら自分も落ち着かなくなってきた。ああ目の毒だ、だけど懸命な指導から目をそらすわけには…

逃れる様に辺りを見回すと一夏も落ち着いてない。なんか教科書を忙しなくめくる典型的なわからん坊やな様子である。落ち着かないの大三角形が教室に出来上がっていた。

席が遠いので教えてあげる事も出来ずにいたら山田先生が気づいたららしく質問した。

一夏は何も分からないと答えた。

私は隣ののほほんさん(一夏がそう呼んでた)と一緒にこりや大変だ音頭を踊った。

「こりや大変だこりや大変だ」

「そこ、五月蠅い」

丈夫な出席簿で頭を叩かれました。これは仕方ないと思った。

「クラス代表を決める」

織斑先生はホームルームの時間にそう言った。

「一夏がやるべきだと私は思います、一夏のコミュニケーション力なら上手くやれると思います。会って間もないですが一夏は尊敬に値する友達ですから、」

そうだよ！みたいな賛同の声がそこら彼処から湧く。まだ互いをそんなに知らない仲で役目を抜擢するのは正直難しい。ここは一夏に任せてしまおう。いけるいける。

「待ってくれ！なら俺はビオレを推薦する！」

「別に良いよ、受けて立つ！」

「別に良いのか!？」

一夏はやはりそこまで頭が良くないなあ！こんなの多数決とつたらイケメン一夏の勝ちでお終いよ！私のあの長々としたあの推薦理由もそれを見越してのことよなあ！

あの演説で周りの人は一夏尊敬するメンズという関係を知り、自然と上下関係、不等号を付けただろう。この勝負、私の負けだあ（歓喜）！

「ちよつと待ってくださいまし！」

「その声はセシリアさん！さてはノーブスオブリージュですね！」

「意味も分からず変な使い方しないでください！…そんな事ではなく納得いきませんわ！こんな浅はかな理由でこの重要な役目を決めるのはおかしいですわ！ここは代表候補生たるこの私が務めるべきです！」

「

その後もセシリアさんは極東の島国猿がどーのこーの言っていたが頭に入らなかつた。ただ、ただ自分が、面倒事を避けたいという打

算的な理由で一夏を推薦した事を恥じた。

セシリアさんの向上心とその見事な牽引力に感嘆してしまう。

セシリアさんこそが相応しい、そう言おうとした時、

「イギリスだって島国じゃないか。それにイギリスは飯マズ國が何言ってるんだ。」

「なっ：!?! あなた達、私の祖国を、イギリスを馬鹿にしますの!?!」

喧嘩が始まった。

その時、私は直感的閃きが脳内を駆け巡る！

「のほほんさん、手袋を持ってない?」

「ん〜?あるよお」

「素晴らしい!」

ん〜が可愛いのはほんさんから軍手(後で聞いたら整備で使う予定らしい)を借りた私は機を伺った。

「ではクラス代表はISによる決闘で決める。」

ここしかない!織斑先生のその言葉と同時に私は

「セシリアさん!」

軍手を投げ渡した。

アイコンタクトで意図が通じたセシリアさんは、一夏の足元へ受け取った軍手を投げつけ、

「決闘ですわ!…っつてこれ軍手でしてよ?!」

「しまった!これは画竜点睛に欠いてしまった!」

後決闘には自分も含まれてました(途中から話聞いてないマン)

IS適正値を伸ばせ!

3人で決闘することになったらしい。よく分からないがまあ軍手渡せたしいいや。

セシリアさんはその後、落ちた軍手を拾って返してくれた。やはり良い人だ。

のほほんさんとなんと良い人だと褒めちぎったら、わちやわちや反論しながら去って行った。クラス全体の雰囲気はセシリアさん生真面目一生懸命ガールなんだなあと思ったのかほんわかった。

極東の猿発言は頂けないと思う人も居たようだが、今の一連の行動から悪い人ではないと言う認識がクラスメイト達の間で認知されたようだ。よかったよかった。

平和が一番!

決闘するにあたって、まず1つ目の懸念事項はIS下手くそマンの私そのものだった。IS適正値はD判定。まあ、何というか一夏がBで血筋的なものを考えれば、私はただの努力では間違いない差が開いてしまうと思う。効率的な、ある意味一貫したコンセプトの元トレーニングに励むべきだ。

機体?そんな事は気にするな。下手くそが何使おうが多分一緒だ。宮本武蔵は割り箸でハエを掴む。私は割り箸では何も掴めない。要するにそういう事だ?。

割り箸ではなく箸だという指摘を受けつつ、そんな話を仲良くさせてもらっている女子達と話し合う。一夏はサムライガールのホーキさんがその見事な瞬発力を活かして攫って行った。

デイスカッションが始まった。

「まず、この一週間で何をするつもりなの?」

「まあ出来る事は予習と体質改善、後はイメトレくらいかなあ。」

「体質改善?」

活発そうで可愛いヤッターな相川さんが尋ねる。

「すぐに効果が出るとは思わないけど、ISが女性しか扱えないなら男性ホルモンの抑制と女性らしさについて勉強するのは自然じゃない?」

「んーそれはあるかもねえ（面白そうだから乗ろう）」  
「なるほどお!（なるほどだ!）」

のほほんさんと相川さん、他数名の女子からのコンセンサスを得た私はこの理論は的外れではないと感じた。

デイスカッションは続く。

「その為にも皆にはISについてと化粧について教えて欲しい。」

「え、化粧もする?の」

「勿論だ。ISにはこころがあるって太宰治が言ってた。ならば女性らしさは内面外見両方に関心を向けるべきだと思う。」

「太宰治の時代にISはないし、こころは夏目漱石だよ…」

聡明なる四十院さんからの指摘を受けつつ、今後の予定が決まった。

実は化粧についてはマジが7割、打算が3割だ。

私は女子高生というプライスレスな人たちとの共通の話題が少ない。自分語りは好きくないぜ女の子はって我が友はつらつらと語ったのは記憶に新しい。取り敢えず同意だ、赤ベコマンになれ!しかし同意だけはいけないぞと言われたのだ。

ならば、こころは相手の得意な話題、関心のある話題について自然な流れで勉強していくのがベスト!

デイスカッションは深まる。

「機体はどうするの?」

「打鉄でいこうと思う。無骨な名前がカッコいいし、細身の機体は似合いなそうだし、」

「まあ、防御力高いし良いんじゃないのかな」

「よし!じゃあ決まりだね!」

相川さんの一声で当面の予定についての話は終わった。

その後は化粧について教わった。ビオレは肌が綺麗と言われました。まあビオレだからね!?

デイスカッションは終わった。

お勉強が終わりさあ家に帰るかと思ったら山田先生からの呼び出しがきた。

筋トレ？昨日やったから今日はおやすみです。

職員室へ向かい山田先生から寮の部屋の鍵をもらった。相部屋なので相手がいるがそれは内緒ですつと言われた。山田先生の微量の嫌がらせに私は喉から喘ぎ声を出そうになるが堪える。我慢しろ！

女子のフェロモン漂う廊下を不屈の精神で渡る。

皆さんあんな部屋着で廊下を彷徨くなんて良く無いワァー、着込んででもそれはそれで意識されてると勘違いするから良くないワァー。

どうなつても魔羅魔羅するこの廊下は魔羅の道と名付けました。体内にフェロモンを取り込まない様に小さく薄く呼吸しながら何とか部屋の前まで来た。さあ、相手は誰だろう。まあ一夏だと思っけど。

扉を開け「誰？」かけて閉めた。アカン。女子やんけ、一夏じゃない、心の安寧が、緊張してきた、

蜂蜜の罫による自身が訴えられた時の対処法を考え始めた私に、こちらを伺いに来たのか同居人が廊下に出てきた。

相手は

のほほんさんでした。

「どしたのー？同居人さん？」

のほほんさんは全てを知ってる様な顔で聞いてきた。電気ネズミなパジャマは、彼女のアイデンティティとの調和性が高く非常に魅力的だった。

しかしそのパジャマは有難い。このままでは血圧が高まって危なかったよ。何とかその格好はこちらの力が抜けて助かるよ…

……待てよ、実はのほんさんは男性からの性的な目で見られる事に抵抗があつて、だから体型が表れにくいダボダボな服を着てるのでは？この性格や言動も女性ではなくマスコットの的な目で見られる為では？

加速する思考と脈拍は1秒を長く錯覚させる。

考えた結果、私は

「そうだよ私が同居人さ、これからよろしく頼むよ」

考えるのをやめた。

だってこんな想像100%で人を判断とか失礼だしね。

のほんさんと部屋ルールを設ける事にした。それはもうしっかりきつかりと。

「こんなにしっかりしなくてもいいんじゃない？」

「ダメだよ、男を信用してはいけないよ。ポテチのうすしお並みに信用してはいけないよ。」

「それは大変だあ！」

## 夜のトレーニング

飯を食べてからしばらくして、腹も落ち着いてからトレーニングルームへ行つた。一夏は木刀とダンスしてたから置いてきた。

女子向けというのもあり、バーベルよりも機械系が多く、これはこれで良いなと思いつながら軽く準備体操をする。静的なストレッチはいけませんよ！性的なストレッチもいけませんよ！アーメン！ん？、アーメンというのも語感的に：

女子もいない貸切の中、一人で盛り上がっていた所の私だったがトレーニング前に気が散っているのはいけない。集中せねば：

しかしまあこのマシンやマットを使っていたのがオール女子というのとは何か度し難い。ぬんぬんぬん。

いや、いけない！本当に！怪我をしよう！

しかし目の前の物たちは全て男に使われた事のない道具達ばかりだ。私が初めての男：

精神が落ち着いて、トレーニングを開始したのは30分後の事になる。

マシン系をやっているが物足りない。やはり一人でやってもトレーニングは頑張らない。

いや、頑張つてはいるのだが限界を超えられない。もう無理から後数回が難しい。補助の人がいれば死んでからも何回かやる事が出来るのに……。マシン系のデメリットの1つだよなあー。

やはりバーベルとプレート、棒と重り、原初的トレーニングこそが筋トレの本質なのでは？と、モヤモヤしながらマシン系の器具で励んでいたところ、織斑先生がジャージ姿でやってきた。

「む、メンズか」

「織斑先生もトレーニングに？」

「ああ、最近忙しくてまとまった時間が取れなくてな、久しぶりにガッツリやりに来た。」

「では、一緒にやりませんか？補助が欲しくて」

「まあいいだろう」

織斑先生と夜のトレーニングが始まった。

ベンチプレスの補助に入ってもらってある時に、ある発見をした。胸が大きい織斑先生はシャツが持ち上がり、へそ部分からシャツの中が見えてしまうのだ。

しかし今の私は筋肉で頭がいつぱいだ、そんな事で集中力は乱されない!!（後でどうなるかは分からない）

彼方への一抹の覚悟を決めながら、今、目の前のトレーニングに集中していたら織斑先生が尋ねてきた。

「見れば分かるがお前は日頃からトレーニングをしているのか？」

「ええ、そうですね。こんな静かな感じでやるのは初めてですが。」

「そうか。ISは下手が乗ると慣性を殺しきれなくて体を痛める。」

慣性中和の効果をISは持つてはいるが、無茶な動きをするには体鍛えておくにこしたことはない。」

「なるほど、要するにバンジージャンプ中にパフォーマンスしたければ体を鍛えろと、」

「それは違う、、、事もないのか？」

「きつとそうですよ。自信を持つて！」

なんか急にふわふわした会話になった。

「ん、そういうえばお前にも専用機が与えられる事になったぞ。」

「お、おお、そんなんですか」

と思ったら真面目な話になった。

「…反応が薄いな。まあ打鉄に希望の機能を付け足すだけだが」

「いや、嬉しいんですけど身に余るなあと」

「お前の想像以上にお前の価値は高い。自衛という面でも持って置いて当然だ、との事だ。」

「筋肉う」

「なんだそれは？」

「いや、筋肉が主人を守りたい！でも力及ばないのか、って言う肉体の心の声が漏れました。」

「慰める訳ではないが、自衛という面でお前の筋肉の価値が落ちるわけではないぞ。さつきも言ったがIS操作に置いて筋肉及び他の身体的要素は大切だ。それを活かせるかはお前次第だという話だ。」

「織斑先生優しい！ありがとうございます！」

「まあ、私も教師だ。悩む生徒がいたら助言の1つはくれてやる。」

かつこよかつた織斑先生！（卒業式みたいな感想）

「それで専用機に何か希望する機能はあるか？」

「∴では、さつきの話から思いついたのですが、」

織斑先生とのトレーニングを終え、無事に寝室に戻ったら、可愛いほほんさんが寝てた。可愛い。頬をぷにとしちやえ！

しちやった！

これから女子力あげてIS適正あげるわよ！（とりあえず形から入る）

まずは大豆イソフラボンとかサプリメントを摂取！効果あるのか  
だつて？

知らん！

次に美容液だなんだを塗る！効果は知らん！

後は女子ぽつく体育座りしながら携帯いじる！少女漫画でこうし  
てた！

後はくねくねしてみる！

そんなこんなしてたら眠くなってきた。頭に織斑先生のヘソから  
の景色がフラッシュバックしそうだけど寝る！のほんさんの方を  
見ながら寝るな！やってしまうぞ！耐えろ！

あれこれ考える前に寝る！（もう考えてる）これが禁欲の秘訣！

こんな生活を1週間、決闘（まあ試合）までしてた。

IS適正はDからCに上がってました。

「「うっそお!!!」」

「おい待てなんだその反応。」

## 素人は素手が1番

控え室なう。

緊張してる体をほぐそうとスクワットをしている男、ビオレです。先程、息を切らして走ってきた山田先生から専用機、打鉄に幾つかの機能を付け加えてもらったISを受け取りました。

少しは機能を付けてもらえるかなと思っただけど、予想を上回る結果となった。まさか、全部付け加えてくれるとは。

訓練は一応少しは出来たし、少しは動ける様になった。

しかし一夏のISはすごいなあ、素人が扱える物じゃないと思う。物騒だわー。

スペックデータ見たらもうピーキーであるとか分かってしまう。スピードあるけど操作が難しいという感じで、短期決戦が得意なやつだ。

正直スゲー怖い。気分はあれだ、鉄バット持ったバイク乗りがこちらに向かってくるイメージ。分かってくれる人はいるかなー。

一方こちらは体重重めにして、速度は出るけど加速が遅い、でも操作は簡単という安心設計。盾もあるし避けないで受け止めていくスタイル。

男子が女性に勝る点、身体能力と体重を前面に押し出した機体だ。それを実現するための機能も実装してくれたしね。

当たって(タックル)、砕ける(相手が)なシンプルな野蛮スタイル。素人が武器持ったって使えるわけない。何より銃だ剣だを人に向けるのが抵抗ある。

何というか、武器を人に向けることに慣れたくないのだ。ISの武器は競技という枠を、その一線を超えた危険性があると思う。絶対防御がどーたらではなく。

相手側のエネルギーを無くしたら勝ちらしいこの競技、武器を使う必要はないはずだ。

殺傷能力の比較的低い素手。もしくは拘束による無力化とか。

後ろから抱きつけばいい具合に無力化出来るのでは？

とにかく武器はやめだやめ。

後、武器らしい武器などを持たない方が自分は強い。

武器は加減が誤りそうで怖いし、その恐怖がISの操縦を鈍らせる。

なら、加減の調整がしやすい、生身の延長である素手が1番やりやすいはずだ。

「ビオレくん、準備はできましたか？」

「ええ、大丈夫ですよ山田先生。」

よし、いくぞ！

—————一方、山田先生—————

控え室にいるビオレ君を呼び行ったのですが、雰囲気ガチです。

なんか、雰囲気ガチ初心者IS操縦者というより番長が喧嘩しに行くような、重々しい感じですよ。

緊張してるのでしょうけど、今の顔は子供には見せられませんね。

「やるべき事、やりたい事を出来るよう頑張りますね。」

声音は優しく、しかしISを危険物だと認識している、厳かな態度で彼は控え室から出て行きました。

広い背中は初心者ながらも何かするのではないかと、そんな期待をしてしまいます。

—————ビオレ視点—————

アリーナの入り口、ここからISを装着して、出て行く。

みんなからの激励も受け取ったし、ルールも把握した。覚悟も決まった。現状、自分に必要な事は全てある。

「頑張れ自分！ファイトオー、ウオオオオツツツシャアア!!!」

そして試合場へ駆け出した。

ISを装着してるのに走って向かうその姿は違和感しか無かった、と後で皆から言われた。

————セシリアさん視点————

「シャアアア!!!」

アリーナに居た全ての人はその雄叫びを聞いたと思います、肌全身にビリビリと伝わるその声は一発で、あ、こいつ気合い入ってるわと感じた事でしょう。

それは対戦相手の私にも伝わり、脳内イメトレしていた一連の貴族トークも全て吹き飛ばされてしまいましたわ。

相手は未熟ながらも本気でくる。ならば相応に応えるまで。

ビオレさん本人としては暴発したテンションの結果からの雄叫びだったのでしょうけど、それは私の砂つぶほどの油断を吹き飛ばす結果になりましたわ。

付け入る隙を自ら無くしていくスタイル。ビオレさんの人生はこんな感じで無自覚に厳しい道へ行くのでしょうかね。

そして入り口から現れた彼は、

ISを装着してものにも関わらず砂埃を撒き散らしながら、地面を碎きながら走って来ました。滑るように移動する物だと思っていたISを、筋肉の力によって走らせているのでしょうか。

どこからか、何かするかもってそういう事じゃないいいという山田先生の悲鳴も聞こえます。

こいつはヤベエですわ。

「さあ！競い合いましょ！セシリアさん！私の準備は万端です！ムフー！」

さも、準備は出来ていますと言わんばかりの顔で両手を広げ、ビオレさんはそう言いました。常識を準備し忘れずれるとは、言えませんわね。

だって本人真面目そうですし…鼻息荒いですし…

しかし、このセシリア・オルコット、代表候補生としての威厳を示

さなくては!

「最後のチャンスを与え「もう!そういうのは!いいので!ready, ready, ready?!」え、?え、ゴーですわ!!」

咄嗟に相手に照準を合わせ、無意識に引き金を引けたのは訓練の賜物でしょう。

そして、相手の顔面に直撃したのも訓練の賜物でしょう。

そして、顔面に直撃しながらもこちらへ進撃してくるビオレさんは、化け物か何かなのでしよう。

こんな奴見たことない。見たくもなかった。

「これが男という奴なのですか?!」

「ああそうさ!男の子は皆こんな感じさ!」

どこからか、んなわけあるかあー!という声が聞こえてきます。

えっ!違いますの?!箱入り娘の私は混乱したまま、最早誰が本当の事を言っているのか、自分の思う男性とは一体なんなのか、訳も分からないまま、逃げる様に私は空へと上昇していくのでした。

ああ、無限に成層圏《インフィニット・ストラトス》へ逃げてしまいたい。

後ろから聞こえる、スマートではない音を聞きながら、そう思わずにはいられませんでした。

あつ、待つ、果て…

顔面にレーザーを食らいながらも進み続け、視界が開ける時にはセシリアさんは目の前からいなくなっていた。

さすが代表候補生、ヒットアンドアウェイが上手い…。

「あなた、浮けませんの？」

「いや、浮かべます、飛べます！大丈夫です！貴方の期待に沿ってみせますー！」

「いや、期待してないですし大人しく負けて欲しいのですが…」

「あ、それは無理です。」

「では派手に散って下さいい！」

そこからはレーザーライフルで撃たれまくり状態。

近づかせない、完封してやるという初心者相手でも手を抜かない、その若いながらのプロフェッショナル精神に感服する。

小声で「近づかないで来ないで…」と言うのも、彼女の代表候補生としての切迫とした雰囲気伝わる。

直撃は避けようと盾で凌ぎながら、私はベストなタイミングを伺う。

チラ見、盾に隠れる、チラ見、盾に隠れる…

………んなぁーアアアアアア！

「………ああーまどろっこしいーいま行きますよセシリアさん!!決闘を！貴方の望む決闘を！する為に！」

「ヒイ、こ、来ないで下さい！」

「私は世の男性の代表として、みっともない戦いは出来ない！今から私は止まりません！貴方に辿り着くまで！」

何故か動揺して照準ブレてるし、隙は今！なら行くしかない！

そして私は空へ跳んだ。

そう！跳んだのだ！

さて、ここで私が希望した機能についてあげよう。

端的に言うとう A I C (アクティブ・イナーシャル・キャンセラー) を付けてもらった。自分の手のひら、足の裏周辺限定で。

本来、相手や銃弾を止める事を目的としているこの機能、実は他の使い道もあるのではと思った。

自分の手足そのものを固定し、壁や床を蹴るような移動をするというやり方である。

IS の機動は急激な方向転換より流動的な動きが得意だ。

しかし、この A I C をうまく使えば私の身体機能に依存した挙動が可能であるのだ。

自分次第で方向転換までのロスをゼロに近づけ、ジグザクな動きも可能。

跳ぶというのは誤りなく、私は跳んだ。

セシリアさんの銃口がこちらに合わせてきたらすぐ跳ぶ。

そしてある程度は IS 本来の力も借りながら、崖を登るような感覚でセシリアさんの元へ向かった。

「セシリアさん視点」

下からこちらへ向かってくるあれは、IS なのでしょうか？

地獄の崖から這い上がってくるような挙動で、勘のいい虫の様な動きでレーザーを避け、仮に命中しても止まらない。

というか彼、常に私の目を見ていますわ。恐らくこちらの銃口が向けるタイミングと同時に回避の準備をしてるからなのでしょうが、怖い…。

ひっくり返ったカエルのようなポーズのまま、こちらを見つめ続け、どんな体勢でも進撃する様は恐怖でしかありませんわ。

有限であるこの距離は確実に縮められ、彼の不屈性は底なしの様に無限に感じます。

時たま浮かべる笑顔もなんかもう悪魔か何かです。

「私はカハッ！絶対に諦めないっ！ぐふっ、ハアーハアー、貴方の元へ絶対に辿り着いてみせる。ハアーハアー。セシ、リアさん！」

しかしというかまあ当然ですが、やはりあの動きは疲れ易いらしく、息が切れ始めてます。というか、むせ始めてます。精一杯がもう二杯はありそうですね。

ISの方も変な扱いしてるからかギシギシいつてますし…。

これは早々に決めるべきですわ。

私はブルー・テアアーズを起動し彼の元へ向かわせました。

彼はどうやらこの量の弾幕には対処できないと思ったのか、登る？ペースを早めました。

「はあっはあっ、ハアーハアーぐふっ！ゲホッ、正々堂々、くはっ！」  
苦しげながらも前向きなのはもう本当に異常です。本人は一生懸命なのは分かりますが。

でも対処し切れなくなってきたのか、被弾率が途端に上がり始めましたわ。この調子なら…って急に何してるんですの彼、目元なんか抑えて…ってまさか！

その瞬間、光が辺りを包み込む。

そして

気がついた時にはビオレはセシリア・オルコットに密着と言ってもいい距離まで接近していた。

ーーーーービオレ視点ーーーーー

ここまで来た！

閃光玉投げて、全力で近寄ってここまで来た！

後は、こうだ！

「ヒッ、なんですの?!」

「もう、逃さない！さあ、さあさあさあ！勝負です！」

「もういや…」

セシリアさんの左手と自分の右手をA I Cで固定、これでもう逃げられない。至近距離だから巻き込み事故の可能性もあるのでピットも使えない！

さあ、ここからだ無力化ないしは比較的安全な素手でエネルギーを削るんだ。

「いきますー！」

「ッ…」

ってセシリアさんなんでそんなに涙目なの。そして上目遣いでこつちを睨みつけてくるんだ？

やめろ…そんな目で見ないでくれ、頼むよ。

ああなんとという事だ。戦いの最中なのに、他の事に気を取られてはいけないのに…

私は出来る事を、やりたい事を成し遂げたいのに…

このセシリアさんとの清廉なる決闘の場において、

セシリアさんのその泣きそうな顔を見て、呆気に取られてしまい、

そして何より興奮している自分が居て、魔羅も反応してしまうなんて

そして私はA I Cを無意識に解除してしまった。

「もう、、、いやああああ!!!」

「あっ…」

股間はダメだよセシリアさん、特に今の状態で刺激は

あつ、待つ、意識が、果て……………

試合結果を伝えよう。

結果を言えばセシリアさんの勝利であった。

何故、こんな風な言い方なのか。

それは私が試合中に気絶したからである。

試合の録画を見た。怖かった。不気味だった。

思い返せばセシリアさんは男性との面識が乏しいお嬢様なのだ。そんな人にあんな恐ろしい感じで試合に挑むとは。

ただでさえ怖かったらうに、時間があったら謝ろう。

周りは優しい人達だらけ

b y ビオレ

「頼む一夏！私の失態のせいでセシリアさんは男性恐怖症になったと思う。一夏が上手い具合に男性は怖くないよーって良い方向に導いてやってくれ！今、謝りに行っても多分余計に怖がられる。」

「まあ、見てたら分かるな」

「一夏なら必至に戦えばきつとナチュラルイケメンプレイでセシリアさんの心も安らぐ筈だ。私は必至の前に少しおかしかったんだ。」

「俺がイケメンかはともかくまあやるだけやってみるよ。ビオレが怖い奴じゃないって分かっているが流石にセシリアが可哀想だしな」

一夏あく。お前さんは本当に良い奴だなあく。きつと一夏ならやってくれる。他人任せなのは分かっているが頼む一夏！。

「力に溺れるなよ…一夏」

「ビオレは力に溺れた訳じゃないけどな。強いて言うなら筋肉に溺れてたな」

「ごもつともだ。筋肉というアイデンティティの押し売りは人を幸せにはしないという事だな。私は幸せ×筋肉の方程式の解を間違えていたのだな…。教えてくれてありがとう一夏」

「そういう事ではないけど、まあ今のお前ならもう大丈夫だろ。後は俺に任せてビオレはセシリアに何を謝るのか考えときな」

「もう、一夏イケメン！そんな君を応援しちゃう！ガンバレ！ガンバレ！」

「女らしさについて勉強してるらしいけど正直それは無い！」

発進した一夏のISが発する風は、ほろりと流れるビオレの涙を吹き飛ばした。女の子の勉強はするけど自己投影して行動に移すのは控えよう。ビオレは己の未熟さに反省しながらそう思った。

客観性、コレ大事！

本当に！（自身の試合映像を見て）

一夏の試合は見事である。ISらしい戦い方、私の様な妖じみた戦いでは無い競技としての性質を満たしている。

あんな感じの雰囲気の試合したかったなあ…。

こうなんというか、やるなあ！お前こそ！みたいな感じがする今の試合。精神的な立ち位置が対等というか、真つ当な試合だよなあ…。羨望と少しの嫉妬心で試合を見ていたら織斑先生が来た。

「初めての試合だがどうだった？」

「頭がおかしかったと思います。私もあんな試合してみたい…。どうしたら良いんですかね？頭おかしかった…」

「（いや、正直どうしたら良いとか知らないのだが）まあ、お前が努力していた事は多分皆知ってる。そこまで自己嫌悪しなくてもいいじゃないのか。」

「織斑先生い。あなたはなんて優しくて優秀な方なんだ。私のお願いした機能全て搭載したISまで用意して下さったり、こうして慰めてくれて…本当に素晴らしい人だ」

「（お願いされた翌日に束がああIS渡して来たのは黙っておこう）」

わ、私は先生だからな！生徒の力にはなりたいのだ」

「良い人達だなあ織斑一家は！」

単純思考かつ、人を疑う暇もなく肯定するのはどうかなと思うけど、…まあいいか！（思考放棄）

後、一夏の試合は素人として見たら100点満点な感じでした。ありやモテるなうん。女子の歓声も好印象だしね。

セシリアさんも何と言うか、やるやん男も！みたいな感じでとても良さげです。私の事忘れてくれないかなあ…。

忘れてくれないよね。謝りに行こう。

そうして緊張をほぐそうと頬肉をこねくり回しながら廊下に出た。

セシリアさんに謝りました。

どうやら一夏が口添えしてくれたらしく、想像よりもスムーズに許してくれたと言うか、私の過失を受け入れてくれた。本当に一夏って気が効くなあ。後は女性の熱視線に対して気付けば完璧なのに…

「ところで一夏さんはどこに？」

あ…、セシリアさんも一夏を熱視線で燃やし隊に入隊したのね…

「私はセシリアさんを応援しますよ！」

「？、よく分からませんが応援ありがとうございます…（ちよつと待って下さいまし、このお方善人ですけど勘違いしたら突っ走るタイプ！先程の試合で散々理解しましたわ）…確認ですけど何がですか？」

セシリアは頭の回る女だった。

「？、一夏の事が好きになってしまったんでしよう？」

「!!何故分かりましたの?!」

そしてセシリアは分かり易い女だった。

「女心の勉強、してますから」

ドヤ顔でそう言って胸元をトントンと叩くビオレの顔は少し可愛らしくも小憎たらしかった。いややはりウザかった。

しかしもう思考回路が乙女回路と化しているセシリアはそんな顔は認識していなかった。あるのは

「（もう隠さないで手伝ってもらおう方が私には都合なのでは？、一夏さんは人気者ですし…）」

肉食獣じみたリアルな女の思考！

「手伝ってくださいますの？」

「勿論！セシリアさんはすごく魅力的な人ですから！」

「…では、私の事はセシリアと。これから友人として接するのですもの、さん付けはいりませんわ」

「これからよろしく！セシリア！（ああ！何故私の周りの人たちはこんなにも優しいのだろう！）」

ビオレのポジティブセンサーは今日もビンビンである。

まだ女心の表面の薄皮しか学んでいないピュアなビオレ。自身を禁欲する事により汚れのない純粹さを求めるあまり、他の人間、特に女性も純粹無垢のフェアリーみたいなものだと思込んでいる。

クリオネの捕食する姿を知らない無垢な子供の様な男ビオレは今後、女の戦いに巻き込まれていく。

悩み事も解決して、一夏と共に飯を食べ終えた彼は自室へ戻った。ついでに夕飯はカツカレーとラーメンとチャーハン、そしてのほほんさんと食べたパツフエである。筋肉量の多い彼は基礎代謝が人よりも多い。自然と食べる量は増える。そして体に充足するエネルギーは筋肉の成長に必要なのである。ボディビルダーを目指していない彼は基本食うだけ食って動くというトレーニング方法をとっているのだ。

しかし女性は甘いものが好きなのに太っている人が少ない気がする。

やはりフェアリーか何かなのでは？

慣れた手つきで化粧水を肌にはちペチしながらそんな事を考えるビオレ。隣で眺めているのほほんさんもおおーという顔で覗いている。可愛い。

「大分慣れてきたねえー」

「まあこゝ一週間ずっとやってるしね、流石に慣れるよ。後は乳液塗ればいんだよね」

「まあ、そんな感じじゃない（私乳液塗ってないけど、面白そうだしIS適正も上がってるから良いよね）ムフフ」

何にムフフなのか知らないけど可愛い。そう思ったビオレである。

ボーっと口を開け、虚空を見つめながらお肌をペチペチするビオレの明日はどちらか？

それは誰にも分からない。

—————東サイド—————

ある程度育ててからモルモットにしてやろうと思ってIS与えたけど…

IS適正がお肌ケアしたから上がるとか、停止結界あんな風に使うとか考える訳無いよねえ!!

しかも実際その通りになってるし!

何なのあいつ! ISの扱い方も頭おかしいし、本当に意味が分からない。どうしたらいいのアレ。

束さんも知らない発見をしたし…

…もう少し泳がせておいて何かまた新しい発見でもするのを期待するか! (思考放棄と現状維持)

細胞レベルの天才にも理解できないものはある。

IS博士も男の子は詳しくない。

## 宴と道案内と筋肉拉致誘拐事件（序）

朝のホームルームにて、山田先生が教卓の前で連絡事項を言っている。

「というわけで、クラス代表は織斑くんです！なんか一がいっぱいいいですね！」

「な、なんで俺!?!」

一夏が叫ぶと同時にセシリアが立って、

「それは私（わたくし）がクラス代表を辞退し、」

と言い、

「私（わたし）が一夏が良いと推したからだ！」

と説明を私が引き継ぎ、

「流石2人共分かってる〜」

「でしよう！」

そしてのほほんさんの見事な合いの手が入った。

この一連の理由説明に一夏はポカンと聞いていた。

「そ、そんなの聞いて無」そして一夏あ！今日の夕方から一夏のクラス代表就任おめでとう会があるぞ！皆も奮って参加するぞ！「これはもう無理だな！」

「「一夏くんクラス代表おめでとー!!」」

クラス全員からのおめでとー！で一夏のクラス代表は揺るがない事になった。

一夏がやけっぱちでクラス代表を認めたが、もうなるしか無いのだ。反論しようとしていたがもう無理なのだ。何故なら一夏の与り知らぬ所で皆と就任祝いをする決めていたのだから。

しかしセシリアはアドリブ力高いなあー。のほほんさんは合いの手得意なイメージあったけど、正直セシリアは意外だった。

その後はセシリアによるクラス代表のメリット説明。

後、特訓みますわよというアプローチが入り、箒さんと喧嘩してた。

両方でみればいいという私の提案は秒で却下された。

女の子怖い。頭の中お菓子とお花畑な女子なんてのほほんさんしかいないな（独断と偏見）

私は画用紙を三角柱型に折り、「クラス代表 織斑一夏」とサインペンで書きながら自身の勝利を確信しながらそんな事を考えていた。

隣でのほほんさんは折り紙で輪っかのアレを作っていた。可愛い。随分と長いのは作ってるなあー。

ホームルーム後に一夏の机をのほほんさんと着飾っていたが、授業中に気づいた織斑先生に撤去された。

山田先生は見逃してくれたのに…。

「はい！と言うわけで織斑一夏、クラス代表就任おめでとう！。乾杯！」

「乾杯！」

食堂の一角を貸し切り、宴は始まった。

最近、飯の食いつぶりから学食のおばさまから気に入られた私。そこから食堂の一角の貸し切り、大皿料理のお願いなどの快諾までは思いの外スムーズだった。

やはり筋肉なんだなあ。

あらゆる道はローマに通ずると言うが、それは筋肉にも言える事なんだなど改めて実感した。

材料をこちらが持ち込み、おばさまが料理する。ついでにお菓子の材料はのほほんさんが担当した。

こう言うクラスの枠を出た関係も良いなと思いつつながら私は焼きそばを掻き込んだ。

旨い。

食堂のおばさまと仲良く喋っていたら新聞部の薫子さんと名乗る

女性が来た。

「君が面子美男麗くんだね？インタビューいいかな？」

「いいですけど一夏は？」

「もう終わっちゃった。まあねつ造するから短くても良いしね。」

「ええー。なら私もテキストでいいですよ。」

「一応ね一応。聞いた聞かれたをお互いが認識してるのが記事では大事だし」

それでいいのか天下のISS学園新聞部。

「それじゃ聞こうかな？男性操縦士として一言。」

「ふむ…、世界で2人しかいないと言う希少性を理解した上で学園生活満喫したいですね」

「うん、織斑くんより良いね君。気に入った！」

気に入られた…。

「後はそうだな、一夏くんについてどう思う？」

「そうですね。一夏は凄く良い奴ですよ。男女問わず困ってたら人を助ける様な男です。色恋沙汰絡まなきや気が効く男ですしね。後料理が上手い」

「ほうほう。何というかISS学園の女子から聞いても色眼鏡ついてね、客観性に欠けるから君みたいな感想は良いね。もっと気に入った」

更に気に入られた。

「しかし一夏くん色恋沙汰に鈍感なんだ」

「はい。鈍感と言うか、男と女の線引き意識が弱いつて感じですね。だから異性への好意も友情的と解釈しちゃうし。純粋な奴なんですよ」

「今時珍しい子だね」

「ね」

「お、舌の調子良くなってきちゃった？」

「いやあ聞き上手だと話してて楽しくなっちゃいますね」

「それは記者冥利につきるってもんだね」

「それじゃ君についても聞こうかな？ISS学園で気になる子とかは

？」

「皆可愛いですよ。ただ今の所ISについて必死で恋する暇がなく  
て…」

「まあ、それは分かるかな。私も1年の頃はそんなだったし」

「それに男性操縦士がその手の問題を起こしたら、世の中の男性がま  
た女性からいびられると思うんですよ。ある種の男性のシンボル  
マーク的な所もあると自覚はしてるので」

「難儀な男だなあ」

その後も薫子さんとの雑談をし、集合写真を撮ってもらった。

久しぶりに愚痴とか苦勞を聞いてもらえて心が軽くなった。

薫子さんはインタビューのお礼と言って、今後、何か聞きたい事が  
あつたら教えてあげると言って別れた。

休憩がてら外を散歩していたら、ツイントールの小柄な子が紙を見  
ながらうろついていた。

「うがあー分らない！」

何と過激な女子！

今にもツイントールが踊り出しそうだ。

「ど、どうかした？」

「あ！あんたが2人目の男性操縦者ね！道案内お願い！道に迷った  
の」

「それはいいけど私の名前は面子美男麗だ。よろしく」

「オツケービオレね。あたしは凰鈴音改めてよろしく！」

「ああ！」

握手完了！道案内開始！友達になった（単純思考）

「所でビオレって何組なの？」

「1組だな、一夏：1人目の奴と一緒にだ。織斑一夏っていうんだ」

「なるほどね。一夏は1組なのね」

「?、まあそうだが。お、本校舎が見えてきた」

「案外近くにあったのね…」

「まあ夜遅くて見通し悪いし仕方ないよ」

「あんた見かけに寄らず良い奴ね」

「まあね」

「そこは認めるのね…。まあいいわ!道案内ありがとう!」

「どういたしまして、んじやもう少し散歩してくるわ」

「いってらっしゃい」

そうして凰鈴音さんと別れた。気が合いそうだなーと思いました。

散歩を再開していたら今度はエプロン?姿の女性がこちらに向かって来た。

「あ、君が面子美男麗だね。私は天才博士の束さんだ!ちよつとこつち来てよ!少し注射を刺すだけだから!」

「あなたがかの天才の束博士!。注射???よく分からないけどオーケー!天才の束さんなら安心だ」

「(まさか乗るとは思わなかった…。断られて実力行使を考えてたのに)んじや注射いくよー」

「所でコレ、何の注射ですか?」

「んー…内緒!」

「それなら仕方ないですね」

その後、束博士からISの話聞いた。

「そうしてこの理論が何たらかんたら…」

「なるほどお…:Z Z Z」

「何で象もすぐ寝る睡眠薬注射されてそんなに起きてられるんだこいつ…。まあいいや。しばらく観察しようと思っただけど我慢できない!」

解剖はしないけど半解剖くらいならセーフだよね！しかし重いなこいつ。」

そうしてビオレは束博士に拉致された。

## 筋肉拉致誘拐（終）、そして

「んあ？ここは？」

「あ、起きた。ここは私の研究室だよ。ちよつと解剖する準備するから少し待ってて」

「はい（なんか筋肉が元気ないな）」

「…君って動じないんだね。これから解剖する相手だけど君個人に興味も出て来たよ。（意識はあるけど体が動かない麻酔薬打ったから身動きは出来ないんだけど）」

「解剖って言ってもあれでしょ？献血の採血みたいな感じとか、少し皮膚もらうとか（お？指先が動かしてきたか？）」

「いや、普通に腹とか搔つ捌くよ？」

腹搔つ捌く？いや、それ死ぬやん！

マジかよ！…いやマジかよ！

ちよつ、逃げなきや、どうやって？

………筋肉頑張れ（思考停止からの筋肉万能論）！！

「あ、身動きは取れない様に薬打ったから諦めてね♪ふんふん♪」

…あ、それ可愛いなあ。何かこの人なら解剖されても良いかも。つてダメだよそれは！

「グヌヌぬぬぬ（脈動してくれ筋肉）」

「無駄だつて束さん印の薬だよ。そんな事じや

ピシリッ

ん？」

頑張れ俺、ここで死んでたまるものか、束博士は可愛いけどやつぱりダメだ。やらねば殺られる！

筋肉よ唸れ唸れ唸れ唸れ。

気合いを入れる、スイツチを入れる！

「逃げなくては助からねばこの筋肉は唸らねばならない。私は世の中

の男性の希望となり、今の女尊男卑な世界を正しい方向へと導かなくてはならない。一夏にこの世の男性の希望を一身に背負わせる訳にはいかない。友人達を悲しませる訳にはいけない。」

「ちよつとお前、」

「私は生きる。生きる理由があつて、生きるかくごがある。さあいくぞ、呼吸は深く、筋肉は脈動し、私は生きるぞ。ウオオオオ」

「いや、その拘束を壊せる訳が、」

「アアアアアアアアアアアア!!!」

バキンツ

「エエエエエエエ!!!!嘘だろお!」

「フシューフシュー。??!!待っていてくれ皆。私は必ず帰る。どこへ向かえば良い?分からね!こつちに行くぞ!」

「そつち壁、え?」

—————東視点—————

あいつは独り言の様な事をブツブツ呟きながら壁へ歩いて行った。力み過ぎたのか、体は全身真っ赤になつていてその姿は人より鬼に見える。

気でも狂つたかと思つたら今度は壁に向けて砲丸投げを更に低く構える様な姿勢を取り始めた。

最初は分からなかつたがすぐに分かる。天才の私には分かる。

あれは殴る気だ。壁を。そしてその瞬間はもうすぐ来る!

そして筋肉の奔流が解放されるツツツ!

ドシヤヤアオ。

壁は破壊され、風が吹き荒れる。

それはそうだ。殴つた壁の向こうは上空3000メートル。海の上なのだから!

「残念だったね!どこにも逃げられないよ!さあ、大人しくして「今、行くぞIS学園へ!」つて嘘だろお!!」

あいつ飛び出して行きやがった！  
急いで追いかけなきゃ！

つて、致命的な所に穴開けやがったぞあいつ！

————ビオレ視点————

壁壊して外出たと思ったたら空中でした。

いやあ、だつてねー。普通空にいるとは思わないじゃん。

とりあえずどうしよう。

上を見上げる。人参型のロケットがこつちに突っ込んで来る。あ、あれに乗ってたの!?

そして並走して来た。なんかもう束博士必死である。さつきまで私が必死だったしあいこだね。

しかし落下中の人に並走するなんて操縦上手いな束博士。

「お前、ホントに、ふざけんなー！」

「いやあ本当にすみません。私、必死になると周りの事を気にならなくなるらしくて。この間も代表候補生のセシリア・オルコットさんにもそれで失礼をしてしまいました。」

「いやー喋ってる暇ないんだけどねー！とりあえずこつち来い！おバカ！」

「…人体実験しません？」

「んな事言ってる場合か！」

あ、中に戻された。

「とりあえずこれ！お前の打鉄！返すから私を乗せて早く脱出するぞ！」

「あ、このロケットもう保ちませんか？」

「そりやそうだこんな大穴開けて今にも爆発するぞ！」

天才のロケットも殴れば壊せる。ビオレは学んだ。

「了解しました。行くぞ打鉄！」

装着完了！束博士を抱き上げて……

改めて見るとやっぱり可愛い人だなあ。

「何やってんだ！早く脱出するぞー！」

「おお、そうだった。行きますー！」

頭を叩かれた私は大人しく脱出する。

そうして脱出した直後、人參ロケットは爆発した。

「おお、危なかった。ありがとうございます東博士。助けていただき」  
「（なんか礼を言われるのも変だけどいいか）うん！そうだよ！感謝して欲しいなー！」

「やはり東博士もいい人だったんですね。それなのにすみませんさつきはロケットを壊してしまい、」

「そうだねえー。大分困ったよ。とりあえず東さんを近くの陸に連れてってよ。あ、慎重にね。」

「はい！了解しました。」

やはりあんなに必死に自分だけでなく私も助けようとした博士はいい人なんだ！間違いない！

しかし女性をお姫様抱っこなんて初めてした。緊張する。

「ん？君、顔赤くない」

「そ、そうですかねえ」

「……………あっそういう事。ほれほれー、天才東さんの一生に一度のサービスだぞー」

「あつやめて、あかん、あふつ」

「（ちよつと楽しいかも、んーこいつ興味湧いて来たな）それじゃこの後もよろしくねー！ビオレ！」

「よろしくお願ひします（これが…役得！）」

こうして仲良くなった2人は順調に近くの陸へ向かって行った。

「ところでさびオレ、ここどこかな？」

「なんかドイツの基地？つて書いてありますよ？」

「そんでさびオレ」

「動くな！2人共！ISを装着して我がドイツ軍に攻め込むとはどう  
いう了見だ！」

「この展開は何だろう？」

「天才の脳みそ少しは使って考えて下さいよ。私はもうやだ」

「この天才相手に言うようになったじゃないか。それはこっちのセリ  
フなんだよなあ」

銀髪の少女とIS装着した女性に囲まれています。

## 性別行き先五里霧中

一夏のクラス代表就任パーティの翌日。

IS学園の食堂にて布仏本音は朝食としておうどんを食べていた。  
（昨日の晩からビオレどこ行つたんだろ。散歩してくるから先に寝て  
てって言つてたから寝てたけど…。朝起きたらいなかったし…）

むーむーと可愛く唸りながらおうどんをすすっていたら、

『緊急放送です！緊急放送です！』

いきなり食堂に設置されているモニターから緊迫した声が聞こえる。

朝の15分ドラマが楽しみな本音はドラマの邪魔をした緊急放送に少し残念がる。

「なにになに？」 「どうでもいい事でしょ」 「3人目のIS男性操

縦者とかかな？」 「そうかも」

みんなも緊急放送に耳を傾ける。まあ、反応は良くあるものだ。

「なんだ急に朝から？」

隣で朝からチキン南蛮定食をガッツリ食べてる一夏も似たような反応だ。

そしてテレビの女性アナウンサーは困惑に満ちた表情で告げる。

『先程、現在IS学園に在学中の面子美男麗さんとISの開発者である篠ノ之束博士がドイツ軍の基地に侵入しました！ 面子美男麗さんは「自分は女性IS操縦者だ。男性IS操縦者ではない！だから解剖はしないで！嫌だ！」と叫びその場から逃走。篠ノ之束博士も笑いながら面子美男麗さんにしがみ付きながら逃走。ドイツ軍と警察は現在、面子美男麗さんの身柄の保護を目的とした捜索を続けています。』

（えっ？ええ？ちよつ待っ？……ええええー!?!）

一夏がチキン南蛮を喉に詰まらせつつ、席を立ってテレビに近寄る。

「こら一夏！口に物含みながら席を立つな！」

正論だけどこかずれてる箒を無視して一夏は

「な、何であいつドイツなんだよ！昨夜までここでご飯食べてたじゃないか?!」

と慌てる、

周りと比べてリアクションは少々大きい皆似たような反応だ。

ついでにぎる蕎麦すすつた織斑千冬もこれには驚いたらしく、麵を吹き、むせていた。

IS学園の朝はこうして、ここにいない1人の男で大賑わいであった。

「……………」、一方ドイツ軍基地は……………」

「貴様ら、動くな！ドイツ軍のIS基地に侵入とは何事だ！」

銀髪少女に恐喝なう。でもこれはこれで悪くない気がしてきた。

可愛いし……

ハッ!!思考停止して目の前の事態から目を背けていた!

あ、どうもドイツなうのビオレです。東博士と仲良く海上を移動しつつ、陸に着いたらそこはドイツ軍の基地でした。どうしてこうなつた。

隣の東博士も呆れ顔でどうしてこうなつたらという様子。天才東博士と考へてることが同じだと分かり、少し親近感を覚える。

……しかし良く見たらほえーとこんな状況なのに呑気そうな感じである。こっちはノン呑気なのに……

やっぱり考へてること同じでも感じてること違うや。近づいた親近感は無限遠方へまた飛んで行つた。

「というかその2名、東博士と片方は2人目の男性操縦者の面子美男麗だな！」

しかも顔も割れてーら。あ、でも誘拐されました助けてって申し出れば保護からの日本帰国ワンちゃん？

そう考え、銀髪っ子に助けを求めようとしたら、

「そういえばドイツはこの前、複数名の男性操縦者が居るなら、内1名を解剖なりして今後のI S研究に役立てるべきだと主張していたよ。保護をお願いするべき相手かどうかは私には分からないなあ。」

(ここで私はドイツ軍に捕獲される訳にはいかない！ビオレを利用して逃げよう！)」

「ひっ！、それは本当かい束っち?!」

「もちろんさビオレっち！天才は嘘つかないよ！天才だから！」

「た、確かに束っちは天才、それは本当だ。：なら今の話も本当と言うわけですね！ありがとう」

「(ビオレは言われる事全てを本当だと信じるなあ。いつか痛い目に遭いそうだ。ってか今遭ってた。)なら、どうすれば良いか分かるよね？」

大丈夫、分かってるさ。

つまり2人目の男性操縦者である自分はドイツに保護という名目で解剖される訳だ。ど、どうすれば。分からない、自分は天才ではないのだから。

ぬんぬんぬん…

……………ん？、何か天からの啓示が降って来そうだ…。

まず、2人目の男性操縦者はドイツに解剖される……。なら、2人目の男性操縦者じゃない人はドイツに解剖されない……。

そして、相手は自分を2人目の男性操縦者だと思っている……。なら、自分は2人目の男性操縦者じゃないと相手に思い込ませれば……。

論理的思考の果てに一筋の光とも錯覚する解決の策が生まれる。

自分が女の子なら解剖されない！ (証明完了&神の啓示終了)

そうと決まれば今から私は女の子だ！ (自己暗示開始感)

「……分かりましたよ東っち。この状況からの解決策が！」

「そうだろ分かったろう！」「自分は女の子なんですわね！……ええそうなる？」

そうして私はドイツ軍に向けて、胸を張り、堂々と述べた。

最近一夏にキモがられた、この練習中の女声で言ってるよ！

「自分は女の子です。2人目の男性操縦者ではありません。ただの軍基地に潜入したIS操縦者です！」

「ならお前はただの重犯罪人だ！捕らえろ！」

やった！男性操縦者じゃ無くなった！

そうして周りのISが捕らえんと襲いかかる！

「やった！男性操縦者から重犯罪人になった！これで解剖されないですよ東っち！」

「やったじゃないよ！これ捕まったら死刑だよ！このアホー！」

「え？それじゃ解剖されないけど死ぬじゃないですか！」

「分かったらさっさと逃げるぞ！こんな事になるなんて、もう笑えなくなるよ！」

そう言って東博士は煙玉みたいな何かを相手に投げつけ、自分の背中にしがみ付く。

「逃げるな！貴様ら！」

少女の声が聞こえる。しかし、すまない！私は死にたくないのだ！

「さあ行くぞー！」

「はい！（背中に柔らかな何かががががが）」

そして逃げるべく空へ飛び立った。

股間部分に気を使った腰の引いた前傾姿勢は過去最速のスピードで空を駆けた。